

時代のテーマはなにか。その性格・質・原因をどう捉えるのか。
ともに生き ともに創る場・事実を発見し・組織し・表現していくルポ

現代における人間疎外の事実・性質・原因をどうとらえるか その回復の事実の発見とルポ・表現の可能性

2000.9.21 柳沢

現代の人間疎外の事実（耐え難い孤独・アイデンティ不在に表象。存在を認めて欲しかった・若者の表現としての犯罪）——何と何の対決なり、何の喪失や創出か。過度の市場原理、効率・採算・結果主義の競争観に基づいた人間観、労働観、教育観、情報社会観。これを生み出す原因・震源地は企業社会の価値観・いのち・人間観。価値の分裂・崩壊・多様化と創出。

これに対する人間の尊厳・人格の尊厳（20世紀の価値——中身は自由な批判的精神・人権・民主主義とシステム）を前提にした絆づくり・ものづくりの場の可能性の追求は、どう展開されているか？ すべてを貫いて労働の価値の浮薄化、弱小化＝人間の否定からの回復・定着。ものづくり・労働の意義・原点。

1) 流通過程での疎外とその回復……資本論の時代に決定的に弱小だった流通部門の肥大化とここでの労働価値論、疎外回復論。すでに大規模にとりくむ生協労働の性格、意義。生活創造のための自律労働が疎外を回復。労働過程は。

2) IT革命のとらえ方。特集「世界」2回のシンポジウムの提起。既に「コンピュータと教育」正統で12年ほど前から提起しつづける佐伯眸著作品。IT革命に象徴される、文明・技術の発達に幾何級数的に比例して進む人間疎外・破壊の人間との関係の転換のテーマ。なにより労働価値説の点検と価値の回復なしに人間疎外からの回復なしの視点。

人間がコントロールできない

～上記2点のために60年以來の40年間に形成したもの。その場合に10年毎に生じた時代のテーマ・キーワードはなにか。連続性と画期は。問いかけの質・原因・実態は。キーワードは＝日常性・創造性・自主性と個と集団。

*

A、労働の仕方の激変……すべてが労働価値の低減化として表現される。人間疎外＝機能、部品化、自己の労働の運命をみれない。つくる主人公になれない事態はブラックボックスの拡大と極度のバクチ性のなかで一層。実態貿易の年間の取引高を金融市場はわずか3日でなす。女子労働、時間労働の基本からの規制 緩和。裁量労働制、労働力流動化による不安定雇用の8割化。3種の神器の 否定・改変……。

B、サステイナブルソサエティー——継続可能な……消費、開発、労働、環境は？

〈疎外〉…自分が作りだしたものが自分から独立し、自分に対立し、自分を否定するものとなり、その結果、自分本来の姿を失うということ（ヘーゲル、フオイエルバッハをへてマルクス）。労働者が生み出した生産物が労働者をはなれ、資本となって逆に労働者に対立し、労働者を支配するという現実の労働者の状態（マルクス。以上社会科学事典）。情報からの疎外が一番。流通過程での疎外。流通過程の労働の規定＝自律した生活創造過程への参加と創出。

〈物神性（商品の）〉…人間の作りだした神の像が、かえって人間をひざまづかせることをいう。商品生産のもとでは、生産者と生産者の社会的関係が、商品と商品という物どうしの関係としてあらわれ、人間の生産物である商品（貨幣、資本）が人間から独立して人間に対立し、人間を支配するようになっていること。

柳田邦男 これまで、誰もやってみなかつた方法で、「いま」という時代の日本と日本人の変貌の全体と細部を描出することを試みた。日本が経済大国ととなつて急速に変わり始めた1970年代以降のほぼ4半世紀に出版されたノンフィクションのルポルタージュなどに映し出された世界をとおして変容の実相を総覧しようというのである。…約一万冊。12巻のテーマ。「『生と死』の現在」「病を越えて 新しい自己（Ⅰ）」「障害とともに 新しい自己（Ⅱ）」「女たちの証言」「不屈の男たち」「愛と情熱の眸」「戦死と自死と」「現代史の死角」「技術社会の影」「事件の悲しみ」「日本人の変容」「国際化の洗礼」労働の現場、その変化、労働問題なし。80年代小つぶに。打率上がったが…。日常性のとらえ方なし。

鎌田 慧 ルポルタージュは、現代という時代を解明するのに、ひとつの素材や人間を手がかりにして切り拓いていく作業です。…取材してきた事実、それは取材者の「事実」でしかもしれないが、その「事実」の構成によって現実が凝縮したものとしてみえてくる、そういう方法。…結局、ルポルタージュは、いずれにしても、現代社会をたんに生産量とか情報で書くのではなくて、そこに住んでいる人間の生活を軸に。

佐伯 眸の2冊。「コンピュターと教育」(岩波)

暉峻淑子「豊かさとはなにか」生活者。

高谷 清の障害観、健康観、いのち観…現代を解くカギのいのち観、従つて障害者観は人間観の基本。ではどう？「人間が「いのち」以外の付加価値で価値評価されるとしたら、彼らは成人しても労働能力はないし、学力・知力やスポーツ能力もない。のみならず人の全面的な介助なしには生きられない彼らは価値ゼロだ。彼らにあるのはいのちそのものだけである…はだかのい

のち」「植物人間はなぜ人間か」・・はだかのいのち（大月書店）。「ふつうの生活を社会のなかで一びわこ学園の将来構想」80年11月。

ルポは時代の問いかけ、テーマをどう捉え描いたか・表現論
時代のキーワードにどう答え、表現してきたか。事件でも、日常でも……。

60年代――勤評・政暴法・安保……教え子を再び戦場に送るな。

その前に、一連の占領下と「独立」ともなう治安対策としての権力犯罪
……下山・三鷹・松川事件を初めとしたルポ。斉藤茂男さんが追いかけて
いるもの（現代と思想27号77年3月）+松川15年で描いたもの。

64年高度経済成長のピーク。上り10年。新幹線、オリンピック。
明治100年以来の軽化学工業から重化学工業化へ。

エネルギー政策の転換――石炭・火力発電から石油文明へ（20年で
壁）。大型タンカー、しかも50年分の世界の船腹作る、技術革新。

人類史上初の15年で4,000万人の民族移動。

技術革新で、ベルトコンベアーシステムで、安い単純労働の働き手――
――集団就職列車。金の卵。このレベルの合理化、整備再編に伴う解雇・
――争議群。

政治の季節の終焉。経済の季節へ。

所得倍増。マンパワー政策。期待される人間像。ヒューマンリレーシ
――ョンズ。小集団管理

通信・電話の自動化。真空管からトランシーバーへ。

任命制教育委員会、勤評、学習指導要領の法的拘束力、学力テスト
――ベトナム戦争（64年以降、75年まで）。

70年代のキーワード

ドルショック――金兌換制停止。パックス・アメリカーナ崩壊。

73、79年二度の石油ショック。原子力への依存。

情報化・軽薄・短小へ傾斜。

福祉元年の崩壊、環境・公害問題の発生。

世界不況の波のなかで労働運動の取り込み体制。国民春闘の出発だが
――春闘敗北行進の出発。スト権スト

ジャパンアズ・ナンバーワン――なぜ世界一早い不況回復、三種の神器
――教育問題――国民の教育権・杉本教科書裁判判決、おちこぼれ、非行、
――家庭内暴力から校内暴力蔓延……社会問題化。

アフガニスタンへのソ連侵略。

80年代のキーワード

社公体制。社会党崩壊過程の始まり。

民活。臨調行革。国鉄、電通がNTT、JRへ。沖電電ファミリー崩壊・再編。NTT株300万円から15万円へ…・民営化。

高齢化・情報化・国際化社会

スリーマイル島の原子力事故。

85年体制・プラザ合意 円高不況。前川レポート。

バブル—89年東証株式時価600兆円に（91年には200兆に激落）。

ベルリンの壁崩壊。ソ連邦崩壊。子どもの権利条約採択。

89年、10周年記念号の内容、面白い（87年沖電気座談会）。

90年代のキーワード

バブル崩壊。戦後最大の不況トンネルへ。

失業 5.4% 349万人。リストラとその性格。ほぼ完全雇用できていた日本の奇蹟に襲いかかるリストラのショックは大きい。

92年、保守革命。自民党一党独裁くずれる。55年体制の終焉。多国籍企業化。そのとき11号でなにを。浅利—沖の「福祉事業」。この施策評価できず。このあとに経団連変わる。個人優先社会をめざして（経済企画庁生活局）
「新時代の日本的経営」—労働観、労使関係観、労務管理観革命

労働力流動化政策。雇用形態の根本変化。エンプロイアビリティ—他企業に行っても通用し採用される力を付ける。自助、会社の折半で。技術や熟練を教育、育てて企業内に蓄積する方式の停止。社内教育、研修制度なし。すべてグローバル・国際競争に耐えられるために…。

生活者（94.1.10朝日社説）「生活者は飾り文句なのか」

人間尊重と「個」の主体性確立… 93.11月 関経協「人事革新の具体策」

「ヒューマン・キャピタリズムとわが国産業・企業の変革」93.10.19

「新しい人間尊重の時代における

構造変革と教育のあり方について」

93.7.20

これからの社会は、創造性、多様性、個性や自由の追求が大きな目的に。人間の個性と創造性を尊重するヒューマンマインド、ならびに未知に挑戦するフロンティア・スピリットに基づいて、社会や生活者の共感が得られる商品…生活者本位の経済構造へ変革していく努力を。

企業市民…企業と地域、社会との絆や連帯感を強める。ヒューマンキャピタリズムと企業の創造的リストラ。…技術・機能が突出する供給者的な発想から、生活者の価値観を重視した生活者的な発想に転換し…例えば「人と人のつながり」「自由な空間」「ぬくもり」「感動」などの満足を。

ともかく、コトバは限りなく共通。高橋晴さんが書いた論文と同じ文面、見出し。なにを、こそ事実で解いてみせるのか。

なぜ、14歳の犯罪、17歳の犯罪——学校・家庭・地域の教育力。
なにを表現し、問うのか。時代が作った価値観、社会を土台に。
消費税導入。社会党内閣と滅亡の道。

競争の質——マンパワー、63年以来の能力主義のとらえ方への
企業社会からの反省と批判。教育への提言（堤）。60年代から90年代当初
までと決定的に変わってきたのではないか。なぜか。

小集団管理から個別管理へ。

技術革新・技術と労働現場、人間。ボルボ4原則。

労基法、女子労働……時間労働、裁量労働体制——連の労働法制。

三種の神器体制、終身雇用の崩壊。8割の不安定雇用と労働スタイル。

賃金とFRINGE BENEFIT＝効率・成果に直接関係する部分——労
使関係に市場原理の徹底——福祉・社会保障制度の変革。IT革命。

世界の流れから10年遅れた多国籍企業化（市場と資本主義の質の革命が進行していることについて鈍感の極のままだ）。資本輸出90年代、世界一。どう企業社会、労働現場に影響してきたか。国際化、国際競争が、競争と労働の質（コスト論など含め）、労働の仕方、現場の人間関係になにを、どうもたらしてきているのか。人間観・人間関係観の芯となる労働観・労働関係の激変を描け——競争を描くことに（渡辺、二宮、上田、山科、徳重氏ら時代シンポ。例、経済96.10,97.6月号座談会。賃金と社会保障などで強烈に問題提起）。

以上のようなキーワードがあるとすれば、それを、どの事実で、どう表現してきたか。経団連はコトバとしてはほとんど同じ理念、問題提起をしている。

いのちの価値の上位に効率・採算・結果・成果をおく。人間関係の浮薄・衰弱・貧困化を生み出した震源地が言っていることと事実。

＊

自然、人間社会ともどもに、労働の現場も、人間関係も、その種や、類が45億年かけて創ってきた価値観や関係性・生態系を崩すような事態が発生してきている。この原因、質、回復が時代のテーマ。ともに生き ともに創る場・再生の事実がどんな時代・舞台のうえで起こっているのか。

では一体それをどう表現していくのか——事実と表現の問題を考えてみたい（小林よしのりは、若者の人間としてのただれが生まれ、人間が獣になるのは日教組の民主教育が原因だ、個と公のとらえ方できず。その時獣に、と説きマンガ「戦争論」また、論文集をだす）。協同の生態系が崩れる時代への人間回復の攻防・挑戦

第10号ですばらしい座談会をしている——その方向・取り組みの提起・問題

提起は、今もなお、共通しているところがある。新鮮で通用するのだが、全くちがうところがある。その土台・基本の考え方が、根本的に変化しているのに、同じコトバ、考え方で事実を捉えているように思えて仕方がない。事例。

そして、人間像・能力像などの決定に、決定的な影響をもつというか、震源地であると思う財界の考え方が転換した。抽象的コトバではもはや語れない。少なくとも90年代に入ると同じ。質と中身が正反対というだけで。

ここで、小集団管理から個別管理にかわるという革命的变化のシステム。それを可能にしたコンピュータシステム。その証拠に、92年のときの企業内福祉の大逆転。沖電気。これの実施も取り消しも狙いがみえないままだった。経団連なり、日経連の政策の変化がみえなかった。

63年OR69年「能力主義」以降のとらえかたはまちがいだった。人間に関わらせる仕方ではなくて「効率・成果」にすべてを関わらせる。これに直接結びつかないところは切る。日本的経営の非合理性を切る前進面と、超徹底的な疎外、搾取関係のシステム。それは孤立、連帯を必要としない。決定的変化は生じていることが見えているか。

*

以上の視点で、見ていった場合、地域に根づいた日常を、13号では、みごとに描いた作品あり。この場づくりが、沖縄、しかも読谷の中。現代の基地闘争は土地返還だけでない。新しい村づくりそのものだ。なぜできた？。文化で…、著者ならではの視点あり。深めて行けたら。小松、家族への価値観。仕事より家族。シェスタタイム。面白かった。働く事の原点。暮らしの原点だ。松謙の技術論、現場の空洞化のなかでの自己の労働の主体獲得の苦闘。次ぎが欲しい。ブラックボックスに入り込む労働・ものづくり。技術の主人公性の奪還は？

考える必要などさらさらない、与えられた仕事のみを、定められた機能のみ……といわれる機能・労働に、何が必要か？ 人間そのものがいない労働現場に、なにが必要か。

IT革命のあり方を考えるときに大変ヒント提起。サステイナブル技術革新・IT革命・文明の発達。基本法臨時国会提案のときに。

IT革命の虚偽性。物神性。情報社会の疎外と人間回復。人間と道具観、関係観の再生。自己の労働の主人公になることは可能か。可能の条件は？

地域・くらし・労働の日常。そこでの創造とそれをとおして創られていく絆・場ができるのか。絆なしに働き、生きることができるのか？。

世界2000.6.7月号 2回で40頁の大シンポジウム。佐伯著作。

経済白書…IT革命の浸透(7.14朝日解説)。赤旗、朝日社説などや大型連載がくまれた。価値の逆転—技術革新。進歩が人間を使う物神性の指摘あり。